

第三十回薪能くるす桜上演記念
妙見法楽連歌 世吉 一卷

平成三十年八月七日

賦御何 連歌

〈初折表〉

三十年を鼓に舞ふや露の庭 裕雄
 昔翁の面輪^{おもむ}さやけし 敏明
 穂芒の波うつ風に誘はれて 泉
 都をたちて旅におもむく 千恵
 静かなるみなもに舟のいでぬらむ 純一
 とぶ千鳥さへ友をよぶ空 一希
 望の月年の瀬の町照らしをり 了
 大晦日^{おぼこもり}に閉づる文箱 多美子

〈初折裏〉

とどきたるたよりに墨の色もよく 真奈美
 輝く末に春の風ふく 敏子
 名にしおふ結びの神に草萌ゆる 俳児
 蛙も恋の歌手向くとや 規子
 忘れえぬおもかげを追ふ鏡の間 かおり
 久しき友と薪能見む 好博
 風鈴の止みて静寂^{しじま}に浮かぶ月 春美
 とほき白山滝のすずしき 了
 おこなひをすます聖や足軽し 規子
 虚空蔵菩薩りと立ちをり 敏子
 袖笠に憂き世を過^ひごすにはか雨 真奈美
 濡れて乾きて陽のあたたかさ 泉
 花びらがちつていくのを見るだけか みずき
 春のとまりをいつかたづねん 一希

〈名残折表〉

幾度か宇治の柴舟見送りて 裕雄
 瀬音に聴くは歌人のこゑ 多美子
 雨乞ひの動かぬ雲をひき寄する 千恵
 天下一なるあつき故郷 規子
 風ふくを今か今かとまぢかねて みずき
 佳きひと来たるよき夕べなり 了
 灯^{ともしび}に背きて語る君優し かおり
 睦みし刻^{とき}を胸にたたためば 多美子
 竹かしぐなべて雪間の跡もなし 一希
 吐く息白し路地裏の猫 真奈美
 するすみをうちまもりたる明けの月 俳児
 峡^かの東屋萩のこぼるる 春美
 還暦をこえて落ち鮎^{あゆ}けふも捕る 好博
 忘れ去られし古酒のつぶやき 多美子

〈名残折裏〉

折りをりに遊び心のあつごゆる 千恵
 学びの道のきびしさぞこれ 一希
 筆置きてしばし安らぐ昼下り 了
 浴衣姿は行くや帰るや 規子
 笛の音の遠くなりゆく旅の窓 かおり
 霞たなびくあふぎみる空 千恵
 咲く花をやさしく包む風の中 泉
 をちこちに聞く高き嘯^{さえず}り 春美

鶴崎裕雄(大阪狭山市) 二 本田真奈美(郡上市) 三
 日置敏明(郡上市) 一 山内敏子(郡上市) 二
 木島 泉(郡上市) 三 ハイディ・ブック||アルフレット
 (ドイツ) 二
 渡邊千恵(郡上市) 四 山村規子(大阪市) 四
 栗田純一(世田谷区) 一 押川加緒莉(神戸市) 三
 竹島一希(熊本市) 四 佐藤好博(美濃市) 二
 古田 了(郡上市) 四 清水春美(郡上市) 三
 渡邊多美子(郡上市) 四 竹島瑞希(熊本市) 二